

いのちの尊さをうたう詩人—まどみちお

皆さんは、まどみちおという詩人をご存知ですか？

あの誰もが口ずさんだことのある童謡、「ぞうさん」や「やぎさんゆうびん」の作詞者です。95歳になる今も、私たちを楽しく、温かく包み込んでくれる詩を生み続けておられます。

まどさんの詩は、ほとんどがひらがなで、また誰でも理解できる平易な言葉で書かれていますが、その作品は、難解な現代詩よりもはるかに奥が深く、仏教的な趣さえ感じさせられます。

そんな、まどさんの作品を二、三ご紹介したいと思います。

1993年に発表された詩に次のようなものがあります。

ぼくがここに

ぼくが ここにいるとき

ほかの どんなものも

ぼくに かさなつて

ここに いることは できない

もしも ソウが ここに いるならば

そのソウだけ

マメが いるならば

その一つぶの マメだけ

しか ここに いることは できない

ああ このちきゅうの うえでは

こんなに だいに

まもられているのだ

どんなものが どんなところに

いるときにも

その「いること」こそが

なににも まして

すばらしいこと として

まどさんはこの詩を通して、

「私たち人間だけでなく、ありとあらゆるものが、ありとあらゆる場所で、同じかけがえのなさで生かされています。生き物だけでなく道ばたの石ころのような無生物だって夫々に自分としての形や性質を持ち、互いに相関係しているのです。

石ころは石ころとしての使命を持ち、野の草は草としての使命を持っています。石ころ以外の何ものも石ころになることは出来ません。だから世の中のあらゆるものは、価値的にみんな平等であり、夫々に尊いんです」

と、語っています。

そうして、いのちの輝きを失った今の日本の社会を見て、  
「もったいないことだと思います。十人十色、百人百色で、みんな違ってるに決まっています。そして違っているからいいのです。自分が自分として生かされていることを、もっと喜んでほしいと思います」と、訴えています。

あらゆるものに光があり、あらゆるものは相寄り相関わっている・・・これがこの世界（宇宙）の真の姿だと思います。

まさに、「青色青光、黄色黄光、赤色赤光、白色白光」（『阿弥陀経』の言葉）であり、しかも、一切のものは、あるがままにおいて、自らに助け合っているのです。

おそらく、まどさんの目には、この世界が「山川草木悉皆成仏」（この世界にあるすべてのものは皆、仏さまである）と、映っているのだと思います。

こうして、「いのち」の輝きをうたい続けるまどさんですが、その目が一度、ご自分に向けられる時、そこには大変厳しい内観の世界があるのです。  
次の詩は、まどさん92歳の時のものです。

きょうも天気  
花をうえて  
虫をとる  
猫を飼って  
魚をあたえる  
Aのいのちを養い  
Bのいのちを奪うのか  
この老いぼれた  
Cのいのちの慰みに  
きのうも天気  
きょうも天気

「いのちというものが、他のいのちの犠牲の上に成り立つということの重みをどう受け止め、理解したらいいのか・・・」

まどさんは自問自答します。そうして、

「やはり一番大事なのは自分です。だからといって、お互いが好き勝手なことをしていたのでは、社会生活が成り立ちませんね」と、語るのです。

ここで言う「自分が一番大事」という心こそ、仏教で言う「我執」と呼ばれるもので、あらゆる煩惱を起こす根元にあるものです。

親鸞聖人は、断ち切る事の出来ないこの我執にまみれた我が身を「恥ずべし、傷むべし」と、深い慚愧の念をもって嘆かれました。

よく「生きるということはそういうことじゃ」と、分かったようなことを言って、真面目に自分自身を見つめようとしなない人が多いのですが、このように、厳しく自己を見る目を持ち続けることは、本当に大事なことだと思います。

この内観の世界をくぐり抜けることによって、初めて生かされてある「いのち」を心から喜ぶことが出来るのです。

親鸞聖人の、この深い慚愧（恥じる心）は、ごまかしの効かぬ目（阿弥陀さまの目）に出遭うことによって起こされました。

そうして、そのごまかしの効かぬ目は、「だからこそ捨ててはおけないんだよ」という大悲心の目であったことに気付かされるのです。

その時、深い慚愧は、そのまま深い喜びに転じさせられていったのです。

まさに、厳しい内観の世界をくぐり抜けることによって開かれた歓喜の世界です。

まどさんは決して念仏者ではありませんが、この詩のように、自らを厳しく見つめつつ、やはり生かされてある「いのち」を喜んでいかれたのです。

次の詩は、前述の詩「きょうも天気」と、同じ時期に書かれたものです。

### きんの光りのなかに

この世には草があるし木がある

というようにして鳥がいるし獣がいるというようにして日々が明けるし四季が巡る

というようにして私とても生かされているふりそそぐ秋のきんの光りのなかに

という思いに浸れるのを幸せにして

この数かぎりない物事のなかの

どんなほかのものでもない

これっきりの

見えないほどの無いほどの

一粒として

まどさんは語ります。

「私を私たらしめている自然へのお礼—それが詩だ」と。

私はこの言葉を次のように言い換えたいと思います。

「私を私たらしめている自然（無為自然）へのお礼—それが念仏だ」と。

平成16年12月 「光明寺だより37号」より